

# カルチャー・ショック 日本人のみた外国



コーネル大学キャンパス風景 (McGraw Tower周辺)

## 穏やかにたくましい韓国人留学生たち

明日山陽子

二〇〇六年六月から二年間、米国ニューヨーク州のコーネル大学に籍を置いた。道での鹿との遭遇や、自然溢れる広大なキャンパスに圧倒されたのも東の間。つぎなる驚きは、韓国人留学生の多さ、そして彼らの「穏やかにたくましい」生き方だった。

コーネル大学の国籍別留学生データを見ると、韓国人留学生は五五九人とカナダの五一五人、中国の五二二人、インドの三五五人を凌いでなんと、第一位である(二〇〇八年秋学期。ちなみに日本人留学生は減少の一途をたどった五四人)。どおりで、キャンパスのあちこちから韓国語が聞こえてくるわけだ。米国全体でも、韓国からの大学

留学生数は二〇〇一年度に日本を抜き、インド、中国に次ぐ多さだ(Open Doorsデータ)。日本の半分にも満たない人口五〇〇〇万人弱の韓国からの留学生がこんなにも多いのはなぜだろう。友人の韓国人留学生たちに尋ねてみると、「韓国でお給料の良い大企業に就職

するには、海外大学院留学が当たり前なのよ」「日本には良い大学があるけど、韓国には良い大学がないから」「今や韓国の大学で教授になるには、米国など海外で博士号をとることが必須」「韓国は良い大学を實質二校しか受験できないシステムで浪人確率も高いけど、海外なら好きなだけ受験できるから」「アメリカで働きたいからね。韓国企業は上下関係が厳しいし、お酒の付き合いもあって嫌」といった回答が返ってきた。もはや、韓国では中上流階層に属していると思われる彼らにとって、留学はごく当たり前のステップに過ぎないようだ。

また、韓国では、子供と母親を米国など海外に送り子供に英語教育を受けさせ、父親は韓国で働いて仕送りを、キログ(渡り鳥の雁)と呼ばれる家族も珍しくないという。仕送りのために単身、一生懸命働くキログ・アッパ(父親のこと)の孤独死が報じられることもあり、韓国の社会問題になっていくそう。しかし、子供に海外で教育を受けさせたいという親の教育熱は冷めやらず、大学前の早期留学も増加している。韓国教育開発院のデータを見ると、二〇〇〇年に四四〇〇〇人程度であった小学校・中学校・高校の海外留学生数は二〇〇七年に約二万七千七〇〇人に増加。うち四五％が小学校での留学というから驚きだ。

留学生に限らず、海外で暮らす韓国人は非常に多い。海外在留韓国人数は六八二万

人(二〇〇九年、外交通商部データ)に達し、韓国教育人的資源部のレポート(Report in Korea 2007-08)によれば、韓国の海外在留者数は、中国、イタリア、イスラエル、インドにつぐ規模だという。日本の植民地政策といった歴史的要因もあるが、韓国企業の近年の積極的な海外市場開拓という要因も無視できない。

話をコーネル大学の韓国人留学生に戻そう。人数の多さに加えて驚いたのは、韓国人留学生コミュニティ(特に韓国キリスト教会)の結束の固さ、助け合いの精神だ。ある男子留学生は、韓国から新しい大学院留学生が来るたびに、出迎える車を出してあげ、タクシーとからかわれていたほど。かくいう私も、しばしば彼らの好意に甘えて買い物などに連れていってもらった。

米国生活の中で親しくなった友人の半分は韓国人の留学生仲間だったように思う。彼らの多くは、私費留学、米国での就職希望といった厳しい条件下でも決してギラギラせず、いつも穏やかで優しい人たちだった。彼らのそんな生き方に魅力を感じるとともに、あの穏やかな彼らのどこから積極的に海外に進出するたくましさか湧いてくるのかいまだに不思議である。結束の固い韓国人コミュニティが、彼らの支えとなっているのかもしれない。

(あすやま ようこ/アジア経済研究所新領域研究センター)